

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

インタビュー研究における自己語りデータの
評価と分析

Evaluation and Analysis of the Self-Narrative Data
in Interview Studies

2013年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科
桂川 泰典
KATURAGAWA, Taisuke

研究指導教員： 蔵持 不三也 教授

本論文は、近年の社会科学における質的研究の興隆と合わせて、活況を呈している、ライフストーリー・インタビューの方法論に関する研究である。

序論においては、質的研究の質にまつわる論議を紹介し、争点となる4つの「問題テーマ」を提示した。続いて、4つのテーマをインタビュー研究にあてはめながら、さらに具体的な2つの問題について論じた。1つ目は、「インタビュー・データ分析におけるコーディングおよび解釈プロセスの定式化」の問題、2つ目は、「多様で不確かなインタビュー・データの性質と一般化やデータの代表性の保証は両立可能か」という問題である。そして、本論文の主たる目的は、2つ目の問題を乗り越えること。すなわち、インタビュー・データの多様性と不確定性の原理を踏まえた上で、実証研究としてインタビュー・データを定立するための方法的探求にあることを述べた。そして、この問題を乗り越えるための新たな視座として、インタビュー・データには、「言語表現」「メタ表現」「非表現」の3つのデータ情報源が統合的に含まれていると捉える、「インタビュー・データの複層性」について論じた。また、インタビュー内容は、「非表現」の影響を強く受けており、それによって、2つ目の問題であるインタビュー・データの多様性や不確かさが生じていること。研究者は、「メタ表現」や「非表現」を参照していながら、そのことを十分に意識しておらず、実際の論文上では「言語表現」のみが参照されていることが、1つ目の問題の原因となっていることを指摘した。これらの問題は、インタビューにおける「メタ表現」「非表現」といった層のデータの、研究法上の扱いと表現形式が定まっていないことによる。そこで、本論文は、複層的なインタビュー・データの中でも、「非表現」の情報に注目し、「非表現」の表現形式を検討するとともに、「非表現」がインタビューの内容に、どのような影響を与えうるかについて検証することを目的とした。そして、「非表現」を検討するために、「インタビュー時メタ思考」という構成概念を提起した。

第1章では、インタビュー中のインフォーマントの「非表現」の1つである、インタビュー時メタ思考が、場面想起法による質問紙を用いて収集され、それらはKJ法によって81項目、22分類にまとめられた。続いて、収集した81項目について、質問紙調査による6件法の尺度評定を行い、因子分析を通して、8因子構成（「評価不安」「意思伝達」「情緒的期待」「ストーリー戦略」「言語化困難」「言語化困難」「共約不可能性」「社会的意義」「場の適切さ」）のインタビュー時メタ思考尺度が作成された。

第2章では、尺度の統計学的な信頼性、妥当性の確認が行われた。また、インフォーマントのインタビュー研究協力動機とインタビュー時メタ思考の関連を分析した結果、研究協力動機によってインタビュー時メタ思考の傾向に差が認められたことから、研究協力動機によって語りの内容にも差が生じる可能性が示唆された。

第3章では、大学生への実験的ライフストーリー・インタビューを行い、場面想起ではなく、実際のインタビュー中における、インタビュー時メタ思考の構造を検討した。その結果、5因子構造（「ストーリー戦略」「伝達意思」「協働的インタビュー形成」「自己開示不安」「言語化困難」）が抽出された。場面想起ではなく、実際にインタビュー研究協力を公募したことで、その公募条件に応じて、インフォーマントが選抜され、因子構造が変化した。

第4章では、クラスター分析を用いて、インタビュー時メタ思考からみた、インフォーマントのタイプ分類を行った。その結果、インフォーマントは、「関係／構築型」（自己開示への不安が高く、インタビューアの見解を参照しながら、インタビュー内容を構成していくタイプ）と「自己／再現型」（自己開示の不安が低く、自己の内にある意見を正確に伝達することを重視し、時にうまく伝えられていないという困難感を感じるタイプ）の2つに分けられた。ライフストーリー・インタビューでは、インタビューアとインフォーマントの対話構築性が指摘されるが、本分析結果は、「インタビュー・データの対話構築性は、インタビュー研究という手法のみならず、インタビュー時メタ思考からみた、インフォーマントのタイプによって規定される」という、仮説的知見を提示するものであった。

第5章では、インタビュー評価の外的基準として、日本版セッション評価尺度（J-SEQ）を導入した。4章で提示された2タイプのインタビューが、J-SEQによって、インフォーマント／インタビューア

一にどのように評定されるかを分析した。「関係／構築型」のセッションは、インフォーマントにとっては、「深さ」や「肯定感」を持ちやすいが、インタビュアーは逆の評価を行っていた。インタビュアーは、「自己／再現型」のセッションの方が、深い話を聞いたと感じており、肯定的な気持ちで面接を終えていた。これは、インタビュアーはうまく語りを引き出せていない、と感じている、インフォーマントは全く別の肯定的評価をもって、インタビューを意味づけている可能性を示唆するものであった。つまり、インフォーマントとインタビュアーによって、面接の価値づけが大きく異なる場合があることが示された。この知見は、インフォーマントのインタビュー時メタ思考を把握することで、インタビュアーの一方的な思い込みによる、インタビュー評価を防げる可能性を示唆している。

第6章では、2タイプのインフォーマントによって、ライフストーリー・インタビューにおける語りの内容に、どのような差異が生じるかを検討した。その結果、インフォーマントタイプ（インタビュー時メタ思考のパターン）によって、自己物語の語り方に違いが確認された。「自己／再現型」は、エピソードについての評価や解釈が比較的定まっており、ストーリーが脇にそれることなく、1つの方向に向かって統合的に語られていた。一方で「関係／構築型」では、エピソードの評価や統合は不十分なことが多く、インタビュアーの質問を受けて、ストーリーは一進一退を繰り返しながら、複雑的なルートで展開し、仮説的統合へと向かっていた。インタビューにおける多様性や不確かさは、「関係／構築型」インフォーマントにおいて多くみられる特徴であった。本章の結果は、インフォーマントタイプを確認することで、インタビューにおける語りの内容が、どの程度固定的なものであるのかを判断する根拠となることを示している。

第7章では、シカゴ社会学の影響を受けたライフストーリー研究、および実験心理学の系譜の下にある自伝的記憶研究における自己語りデータを、「内言的モノログ」、「ダイアログ」、「外言化されたモノログ」の3つの枠組みより整理した。そして、「内言的モノログ」の観測は、事実上不可能であり、多くのモノログ想起の報告は、「外言化されたモノログ」の性質を有していることを指摘した。その後、同一のテーマに関するライフストーリーを、「外言化されたモノログ」と「ダイアログ」の2つの環境で語ってもらい、両者を比較、検討した。その結果、両者の語りの骨子には大きな差異はないものの、ディテールの量に大きな開きがあった。また、「外言化されたモノログ」では、万人に対して、もっともらしく聞こえるように、合理化された語りとなることがあり、インフォーマントの真意を斟酌することが難しくなっていた。エピソードの意味づけの修正および語り直し（再帰的語り）が多く起こることも、「ダイアログ」を通したライフストーリーの特徴であった。よって、インフォーマントの「現在」の視点から、過去の体験を意味づけることを重視する場合は、語り直しが起きやすい「ダイアログ」が有効であり、「過去」の時点における体験の意味を把握したい場合は、「外言化されたモノログ」によってライフストーリーを聞き出すことが有効であることが示唆された。

結論では、本論文で明らかとなった知見をまとめ、今後のインタビュー研究への応用について述べるとともに、今後の研究発展のパースペクティブについて提言を行った。

質的な研究において、ライフストーリーを採取する際は、本論文で提示された、「非表現」を踏まえたインタビュー内容の分析を行うことで、語りの「多様性」、「不確定性」を客観的に位置づけることができ、語りの過剰な一般化、あるいは過小評価を防ぐことになるだろう。また、適切なインタビューデザインの設計にも、有効な指標となることが期待される。

以上より、本論文によって、ライフストーリー・インタビューを用いる文化人類学、心理学、社会学等の人文諸科学研究に新たな方法的視座と知見を提供できたものと考えられる。

以上